

4) 両生類

①概説

青森県内に分布する両生類は2目6科13種である。

「青森県レッドデータブック2010年改訂版」(青森県, 2010)の両生類分野では、クロサンショウウオ、トウホクサンショウウオ、アカハライモリの3種がCランクに、Dランクにカジカガエルを選定されていたが、2020年版として、有尾目のクロサンショウウオ、トウホクサンショウウオ、アカハライモリはCランク、無尾目ではツチガエルとトノサマガエルの2種をCランクに選定し、Dランクだったカジカガエルは削除した。

かつて低地の水田地帯で多数生息していたツチガエルとトノサマガエル、アカハライモリなどは、水田地帯の環境変化により激減している。1963年(昭和38年)、ほ場整備事業が制度化され(青森県土地改良史編纂委員会, 1989)、水田の改良がすすめられてきて、2018年度には圃場整備率は84.9%である(青森県農林水産部農村整備課, 2018)。

かつては一年中緩やかに流れる用水路が、三面コンクリートの用水路等になり、流れが速く繁殖し幼生が育つ場所が激減した。水田とその用水路(緩やかに流れる土水路)で繁殖、採食する種(トノサマガエル、ツチガエル、アカハライモリ等)は水田地帯ではどこでも多数みられたが、現在は、生息地を探すことが大変難しくなってきた。石井(2008)は「圃場整備が進んだ場所では他のカエル類が生息できず、ニホンアマガエルのみが生息可能である。」と記述している。なお、水田地帯で多数観察されるニホンアマガエルやシュレーゲルアオガエルが、周辺に草本や低木等が見られない青森平野等の広い水田地帯では、繁殖期の鳴き声の減少が見られるようになってきた。今後、留意して調査するべきと考える。

カジカガエルは川原がある河川中流域で繁殖、幼生が育ち、変態後は河川周辺や森林地帯で生活している。ダム建設等で水流が安定し河川の攪乱が減少して、川原にヨシやヤナギ等が繁茂したため、本種の繁殖状況や幼生の観察ができにくくなっている所もある。河川の工事や森林伐採等による河川の攪乱の状況によって増減がみられるが、全県的には減少していない。

山地性の両生類にとっては、皆伐地や薪炭林跡地、採草地跡地等には広葉樹や植林されたスギが繁茂して、生息に良好な環境が増えてきた。特に目立つのはモリアオガエルで、繁殖期には河跡湖や山地の池沼、溜池跡、林道付近の水溜り等の樹上等に白い泡状の卵塊が見られる。

クロサンショウウオは、山地の池沼が繁殖地であり、津軽半島、八甲田山系、白神山地等で多く見られる。津軽半島の蟹田町蟹田川支流大川目沢や南沢流域、青森市の天田内川流域では大規模森林伐採や河川改修、道路造りによる土砂の流入などにより卵囊数が激減している(笹森, 2006)。森林の回復により、徐々に産卵数が増えているが、森林伐採時に湿地池沼の保全に配慮が必要である。トウホクサンショウウオは、山麓から山地で繁殖が見られる。特に目立つのは、車道や林道沿いの水溜りや流れのない土の側溝であり、各地の山裾で卵囊が観察される。しかし、危惧されるのは、県内では戦後に植栽されたスギ人工林の多くが本格的な伐採期を迎えている(東奥日報, 2018)ので、今後、各地で大規模な伐採が行われることが予想される。伐採、搬出のため林道改修時に林道沿いの湿地や小池沼が埋められたり、泥水が流入したりすることが多いので、本種を含む両生類の繁殖、幼生が育つ水場の破壊が心配される。

なお、アカハライモリは、山麓や山地の溜池跡や池沼では、かつてと同様に見られる。しかし、放置された溜池は、土砂で埋まったり、決壊したりすることが危惧される。動植物の水辺環境として保全が望まれる。

ウシガエルは特定外来生物に指定されている。「県内では、津軽平野や南部地域に移入され、分布している。」(笹森・木村, 2002)。ウシガエルは両生類や昆虫、小型哺乳類などを採食し、池沼の生態系への影響が大きいので、駆除する必要がある。

ニホンアカガエルについては、かつて和田干蔵が「三戸郡売市村(現八戸市売市)。(和田, 1935)で記録している。また、鱒ヶ沢町での記録(小笠原, 1955)がある。しかし、和田干蔵は、後年には生息記録として取り上げていない(和田, 1969, 1970)。他に奈良典明による南八甲田山系での記録(奈良, 1965)があるが、奈良典明は、「ニホンアカガエルについては、同定の誤りと思われるので削除することとする。」(奈良, 1993)と訂正している。また、向山満は「生息情報がいくつかあったが、いずれも誤同定であった。」(向山, 私信)としている。

日本カエル図鑑における本種の分布図(前田・松井, 1986, 1999)では、本県の西南部から南八甲田山系が生息地に含まれていた。これは、小笠原(1955)と奈良(1965)の記録を基にしていたものと推測される。最近発行された日本カエル大鑑(松井・前田, 2018)では、青森県でのニホンアカガエルの分布域は削除されている。

秋田県や岩手県にはニホンアカガエルが分布しているので、青森県に生息していないと断定することは難しいが、確実な標本を基にした記録はまだない。

近年、風力発電や太陽光発電の設置が県内各地で行われている。尾根筋への作業道や風力発電機の設置による斜面の沢への影響が考えられる。また、斜面や沢沿いに設置する太陽光発電装置による水環境への影響はないだろうか。動植物への影響や土砂災害等の有無を継続してモニタリングする必要があると思われる。

(笹森耕二)

②本文

サンショウウオ目 サンショウウオ科

C

和名 クロサンショウウオ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Hynobius nigrescens* Stejneger

本県が北限、東北地方では、トウホクサンショウウオと生息域が重なる。成体の全長は120～180mm。体色は背面が暗褐色または緑っぽい黒褐色（内山ら, 2002）。産卵期は雪どけの頃からで、本県では低山地で3月末頃から、標高が高く雪解けが遅い地域では、6月頃である。卵嚢は乳白色でトウホクサンショウウオの卵嚢と区別できる。

本県では、津軽半島や八甲田山系と白神山地に多く分布し、十和田湖周辺や岩手県との県境でも記録されている。南部地域の太平洋側では、小川原湖東岸の根井沼のみで見られた（高田, 1971）が、根井沼の改修や周辺の伐採等でみられなくなった。下北半島では生息していない（笹森, 2006）。

森林伐採による林床の乾燥や道路改修等による池沼への泥の流入等の影響を受けやすいので、保全対策が求められる。

（笹森耕二）

サンショウウオ目 サンショウウオ科

C

和名 トウホクサンショウウオ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Hynobius lichenatus* Boulenger

東北地方に広く分布。全長が90～140mm。体色は背側が暗褐色または黒褐色で、多くは淡い色の斑点がある（内山ら, 2002）。クロサンショウウオと分布域がほとんど重なる。同所に卵嚢がみられることも珍しくないが、本種の卵嚢は透明なひも状で、卵がはっきり見える。

産卵は止水中であり、山裾の車道沿いや林道の土の側溝の水溜り、また、山地の水深の浅い小池沼等や流れがほとんどない標高の高い源流でも見られる。

県内では戦後に植栽されたスギ人工林の多くが本格的な伐採期を迎えており（東奥日報, 2018）、森林伐採や林道改修等による山裾や林道沿いの繁殖、幼生が育つ繁殖地の湿地池沼への影響が危惧される。小規模な水場や湿地池沼の保全に配慮することが望まれる。

（笹森耕二）

サンショウウオ目 イモリ科

C

和名 アカハライモリ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Cynops pyrrhogaster* (Boie)

全長は7～13cm位、背面は黒褐色で、腹面は赤く不規則な黒い斑紋がある。背中線が出る個体もある（内山ら, 2002）。

本県が北限で、かつては水田地帯で普通に見られたが、圃場整備により用水路の改良や水田の乾田化が進んで、激減した。だが、モリアオガエルが産卵する溜池跡や河跡湖、山地の池沼等ではよく見られる。溜池跡は、アカハライモリの繁殖や生息に適しているが、放置されたままでは、溜池の崩れや土砂の流入等で、本種の生息環境が悪化することが危惧される。また、山地の池沼は森林伐採等で土砂の流入が見られることが多く、本種の生息環境への悪影響が考えられるので保全の対策が求められる。

（笹森耕二）

カエル目 アカガエル科**C****和名** ツチガエル**環境省：該当なし****学名** *Glandirana rugose* (Temminck et Schlegel)

37～53mm（成体）。鳴き声は“ギュー、ギュー”。北海道西部・本州・四国・九州・佐渡島・隠岐島・壱岐島・五島列島などに分布する。体色は褐色で、背面に多数のいぼ状の隆状突起がある（内山ら, 2002）。

本県では、水田地帯で繁殖・採食して、幼生・成体が多数見られた本種は、1960年代から水田の圃場整備が進むにつれて、激減している。

特に、幼生が変態し陸へ上がるまで2年かかる本種は、水田の乾田化や放棄田が激減の原因である。山裾や山麓の溜池跡や湿地池沼では、本種の生息がまだ見られるが、溜池跡の崩壊や湿地池沼の減少が進むことで生息適地の減少が懸念される。
(笹森耕二)

カエル目 アカガエル科**C****和名** トノサマガエル**環境省：準絶滅危惧****学名** *Pelophylax nigromaculatus* (Hallowell)

本県が北限である。全長38～94cm、繁殖期（初夏6月）の鳴き声は“グルル、グルル、ゲゲゲ”。雄の体色は茶褐色から緑までさまざまであるが、メスは灰白色から暗灰色で、背面に連続した黒色斑紋を持つ。本州（関東平野・仙台平野を除く）、四国、九州、北海道の一部（人為移入）に分布（内田ら, 2002）。座った姿勢がよくトノサマ（殿様）の名がついている中型のカエルである。

本県では、かつて水田地帯で繁殖、採食して、多数見られた本種は、激減した。1960年代から水田の圃場整備が進むにつれて、繁殖地、幼生の生息地、成体の採食地であるゆったり流れる用水路が激減したためである。圃場整備の初期の水田地帯や圃場整備が行われていない水田ではまだ見られるが、年々繁殖・生息する水田や湿地池沼が少なくなりつつある。
(笹森耕二)

③引用文献

- 青森県 2010. 青森県の希少な野生生物－青森県レッドデータブック（2010年改訂版）－. 335pp.
- 青森県農林水産部農村整備課 2018. 農村の概要(4), 農地の整備状況. あおもりの農村整備. p.33
- 青森県土地改良史編纂委員会 1989. 土地改良史. 青森県庁農林部. 1586pp.
- 石井 翔 2008. 津軽平野におけるカエル類の生息分布. 弘前大学大学院農学生命科学研究課修士論文, 16pp.
- 前田憲男・松井正文 1986. 日本カエル図鑑. 文一総合出版, 東京. 206pp.
- 前田憲男・松井正文 1999. 日本カエル図鑑 改訂版. 文一総合出版, 東京. 223pp.
- 松井正文・前田憲男 2018. 日本産カエル大鑑. 文一総合出版, 東京. 274pp.
- 奈良典明 1965. 南八甲田で採集した両生類. 青森県生物学会誌, 7(1/2) : 12.
- 奈良典明 1993. 南八甲田山地域の爬虫・両生類相. 南八甲田山地総合学術調査報告書（青森県）. pp.95-103.
- 小川原馨 1954. 鱒ヶ沢中心 哺乳類 爬虫類 両生類目録. 著者自刊. 5pp.
- 笹森耕二・木村 晟 2002. 青森県におけるウシガエルの生息地と移入経路について. 青森自然誌研究, 7 : 43-47.
- 笹森耕二 2006. 青森県におけるクロサンショウウオの産卵地および文献について. 青森自然誌研究, 11 : 59-63.
- 田高昭二 1971. 小川原湖と周辺の動物. 小川原湖の動物. 三沢市文化財シリーズ, 5 : 18-27.
- 東奥日報 2018. 青い森づくり推進機構 本間理事長に聞く. 東奥日報, 2018年2月17日掲載.
- 内山りゅう・前田憲男・沼田研児・関慎太郎 2002. 日本の両生爬虫類. 平凡社, 東京. 335pp.
- 和田千蔵 1935. 青森県に於ける両生類の分布. 青森県博物研究会会報, 2 : 40-43.
- 和田千蔵 1969. 青森県の両生類（中編）. 青森短期大学紀要, 6 : 1-14.
- 和田千蔵 1970. 青森県の両生類（続中編）. 青森短期大学紀要, 7 : 1-12.